本日の学び テーマ:「福音の前進」 テキスト:フィリピ1章12-30節

【理解の手がかりとして】

使徒パウロはその生涯において、劇的な回心を経験し、3回にわたる伝道旅行へと出掛けて行った。彼は、全く一所に安住することをせず、福音を携えてアジア、ヨーロッパを旅したのであった。その使徒パウロのヨーロッパにおける最初の教会設立は、ギリシャ北部の東マケドニア地方の有力な都市であったフィリピにおいてなされた。そのフィリピ教会宛に、パウロは少なくとも二通以上の手紙を書き送ったと言われている。「フィリピの信徒への手紙」は、そのうちの2、3通の手紙がまとめられた形で聖書に収められている、と考えられる。

「兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい」(1:12)——パウロがいま「知ってもらいたい」と切に願って書き始める内容は「福音の前進」という事柄。このことこそ、福音の使徒として召されたパウロにとって生涯のテーマであった。

彼を取り巻く状況は大変だった。パウロは牢獄の中からこの手紙を記している。おそらく、パウロが捕えられ投獄されたという情報は、フィリピの教会の人々にも、深い衝撃を与えたことだろう。パウロの投獄の知らせは、教会の人々に「福音」の停滞、敗北、後退として受け止められても不思議はない。そう受け取ったフィリピの教会の人々がいたことがこの「手紙」の書かれた理由の一つでもあった。

けれども「神の言はつながれていない」。これは第二テモテの書2章9節に出て来るパウロの言葉である。たとえ投獄という悲観的な出来事を通してさえ福音（神のことは）は「前進」する。だから彼はいついかなる時も、喜ぶことが出来る。パウロは「わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい」と言い切る。

「わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り」(1:13)とある。彼の経験全てが「キリストのため」、そしてそのキリストが知れ渡ること、ここに彼の喜びがあった。私たちもキリスト者として、たとえ自分がどのように非力な者であっても、自分の存在を「福音」の「前進」と無関係の存在と考えたり、また、自分の非力のゆえに「福音」を「前進」せしめることができないでいると考えて悲観したりしないようにしたいと思う。「福音」の「前進」と無関係のところにいるキリスト者はひとりもないからである。

パウロは、いま、獄中であって、いつ刑場に引き出されるか分からない状況に置かれている。そしてその日、つまり「死」は、いつか、確実に、そして突然に訪れてくるであろうことも予感していたのではないか。パウロの「死の覚悟」は明らか。自分に残された地上の時はすでに限られており、それもそんなに多くはないことを彼は読み取っていた。

「一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい」(1:23b)とある。彼の現実の苦しみは大きく、辛いものだったのだろう。しかしながら、それら乗り越えさせるほどの信仰の確信が彼の心の内にはあった。それは、その肉的生活を終えた向こう側に「キリストと共にある」天の御国が待っていることの確信である。パウロの心は、その「キリストと共にある日」における天国での交わりと、なおこの地上にあり「肉にとどまって働く」ことの必要との間で揺れ動いている。

「この二つのことの間で、板挟みの状態です」(1:23a) ——パウロにとっては「この世を去ってキリストと共にいる」ほうが望ましいこと。しかし彼の使命「福音の前進」のためには、どんなに辛いことがあっても、この世に生き残ることが必要であることを彼は確信していたのである。そう確信した時パウロは、選択するのは自分ではなくて神であるのを知り、自分がやりたいことを言い表すのではなくて、神がして欲しいと望まれることを選びとっていく、この信仰者の姿勢に学びたい。

「ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい」(1:27) ——パウロの心に第一にあったことは、(信者が)「キリストの福音にふさわしく生活」すること、その具体については次章でも展開されるが、ここでは、「教会にしっかりとどまれ」という勧め、として理解したい。パウロは「反対者たち」(1:28)によって教会の一致(福音のもとでの一つ)が妨げられることを痛く心配したのだろう。「あなたがたは一つの霊によってしっかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦い」(1:27)とやっているように。

パウロはフィリピの教会の信徒の一人ひとりがそれほど強くなく、周りの敵対者たちの迫害に屈してしまうのではないかと心配していたのだろう。その心配の程をこの手紙から察することが出来る。だから彼は言う。「唯一あなたがたを、一つにならしめる聖霊に全てを委ね、心を一つにして頂き、聖霊によって信仰の確信を強めて頂き、共にそのことのために戦いなさい、祈りなさい、励まし合いなさい」と。

フィリピの社会は異常なほどの異教社会であったそう。30節でパウロが暗示しているように、使徒言行録 16章 16節以下を見ると、パウロ自身フィリピで迫害の経験をしている。「キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです」(1:29) ——キリストにある苦しみ、そしてそれこそ恵みであると言い切るパウロの信仰に共に聴き、共に学ぼう。

【聖書教育より】

「パウロは、この手紙を書くことで、フィリピの教会の人々にも証しする生活を送ることを期待しています。」(聖書の学び～人々も証しを期待されている)「どのように意識して生活することがキリストを証しし、福音が前進することになるのか、パウロの言葉からヒントを得つつ、話し合ってみましょう。」(大人クラス) —— 当教会の本年度の標語「信仰によって励まし合う」